

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.242

ISSN 2432-5295

シェア

CONTENTS

- ◆【シェア】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～08
- ◆新人紹介…08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙

シェア

かつて音楽はライブでなければレコードやCDを買って聴くものでした。レンタルサービスもありましたが法的には微妙、違法コピーも氾濫。そんな中、ステイプ・シヨブズは自前で音楽配信サービスを立ち上げました。当初はダウンロード販売でしたが、後に定額制サービスへと移行します。これが契機となって同様のサービスが一気に広がりました。モノとしてのレコードやCDを所有しないという感覚は新鮮でした。

本来、人々はシェアしながら暮らしてきました。まちなかであれば住宅は賃貸、応接は喫茶店、娯楽は映画館、晚餐はレストラン。住宅も、喫茶店も、映画館も、レストランもまちの共有資産でした。経済成長とともに、いつしかシェアを忘れてしまいました。それによって「公」の概念が希薄化したという指摘もあります。シェアの概念が拡大しつつある今、「公」の概念は復活へと向かうのでしょうか。

レターズアルパック編集委員会

ラグビーと都市計画

三輪泰司：
名誉会長

今年ラグビー・ワールドカップの年でした。「都市計画の仕事は、ラグビーに似たり」といったヒトがいました。サッカーや野球と同じ「チームプレー」です。プレイヤーには役割分担があります。再開発コーディネーターの試験では「何をしましたか？」と聞かれます。権利変換計画ですか、テナント折衝ですかという具合に。これは「コーディネーター」という職能の中の役割分担です。再開発事業すべてで見ると、公共団体施行で、「権利変換」を伴う「第一種市街地再開発事業」の場合、元々の地権者と「保留床」を買った地権者が「ワンチーム」というわけです。コーディネーターは、事業主体から委嘱を受けた職能者で、その立場と権限をもって「ワンチーム」に加わります。



ボンテリカ山科 オープン祝賀会
(羽織姿のオクムラさん)

ところで、「都市」を造るのには、設計から工事まで、「時間」が掛かることを勘定に入れておかねばなりません。

京都の山科駅前の場合、4棟の建築と道路などの建設に3年以上掛かりました。八百屋さんや魚屋さんたちは、公園予定地に仮設店舗を造りました。その名は「ボンテリカ山科」。ここで、新しい建築で商売するトレーニングをしようというわけです。「ワンチーム」のリーダーは喫茶店の奥村さん。今も、A棟の南一階に喫茶店オクムラは健在です。もう一つ、大事なことがあります。染色工芸家・黒竹節人さんは、A棟のあたりに工房をもっておられました。木造ですが、広い。事業計画を左右します。

選択肢は三つ。現在地に残り権利床を得る、近辺に代替物件を得る、事業主体に売却し地区外へ移転する（この場合、不動産売買に伴う税金は免除）。黒竹さんは第三を選択されました。これがコーディネーター最初のお勤め。現在地にはおられません。黒竹さんは、事業成功の第一の功労者、「ワンチーム」の一員です。※ボンテリカII仮店舗からネーミング

シェアからまちづくりの可能性をさぐる

山口泰生：
地域産業イノベーショングループ

先日、プライベートで「SHIKAMI CONCON（シキアミコンコン）」という施設に行ってきました。同施設は、2019年10月に誕生し、京都の二条城南東の式阿弥町に位置しています。建物構造は、コンテナ19基と長屋3軒から構成される非常にユニークな形態となっています。ワインやコーヒーを楽しむことができ、カフェスペースが玄関に備えられており、奥に入っていくと、デザイン事務所、不動産仲介会社、リサーチ会社、整骨院などの様々な企業が入居しています。また『共創自治区』というコンセプトが掲げられており、異なるスキルや経験を持つ人々が協力し、新しいアイデアや価値を創造する場所として活用されています。まさに空間や経験の「シェア」を通じて、新しい経済圏の創出を目指している施設です。



そんな施設で「夏祭り」が開催されるといふことで遊びに行ってみました。炭火焼きソーセージやお酒などのお店や、整体体験やフリーマーケット、ミニチュア制作体験などの体験・創作のコンテンツがあり、どのコンテンツも、同施設の入居企業が企画しているのが特徴となります。少し調べたところ、入居者の中から「自治会を作りた」と声があがり、月に1回入居者が集まるようになったのをきっかけとして、夏祭りの企画へと発展していったそうです。異なるスキルや経験を持つ人々の集まりですが、物理的な空間をシェアしていたことにより、日常的なコミュニケーションが生まれ、こうした素晴らしい取組に繋がったのだと思います。何より、参加者もそうですが、主催者の方々が一番楽しんでる姿も見て、このような「まちづくり」に資する活動に何が大事なのかを改めて考えさせられました。今後も同施設の動向をチェックするとともに、シェアの可能性についても考えていきます。

播州織産地の魅力をシェアする播博

岡本壮平：
都市・地域プランニンググループ

私が関わっている西脇市・多可町における「播博（ばんばく）」（播州織産地博覧会の略称）は、街の中心部に点在する空き家、空き店舗、空き地を「生地マルシェ」の会場に生まれ変わらせるイベントです。生地の産地で、生地の生産者と消費者を結びつけファンを作っていく取組で、毎年1回、初夏の季節に開催しています。平たく言えば「空き空間の利活用」ですが、最近では播博の効果もあってか、空



生産者のプライドと底力が発揮される生地マルシェは迫力満点



駐車場が生地マルシェになりかつての賑わいを取り戻します

家は空き店舗が減少し出展場所探しに苦労するという嬉しい悲鳴も。そうした中、露天駐車場や土日お休みの事務所や診療所等の駐車場をお借りするケースも増えました。つまり、駐車場を時間によって別の機能で「シェア」させていただいています。所有者様のまちづくりへの理解と応援があつてこそなので、ここにも「ともに」というニュアンスを重ねることが出来ます。そう理解すると「シェア」って、友達の輪が広がるような、とても意義深い感じがしてきます。

今年（2020年）はコロナ明けの6月4日に第4回播博を開催したところ、約8千人もの方々にご来場いただき、大成功を収めました。播州織産地への多くの人の思いが「シェア」されたと思うと喜びもひとしおです。

さて、もう一つの「シェア」。『播州織』の一番の特徴は、糸を先に染め、染め上った糸で柄を織る「先染織物」という手法です。播州織は、国内先染織物の70パーセント以上の「シェア」を占めています。実は一大産地なんです！来年の初夏に開催予定の第5回播博へも是非お越しください。一大産地の魅力や底力をそして街への想いも「シェア」しましょう。

目新しく都合よい言葉

増見康平：

建築プランニング・デザイングループ

シェアハウス、シェアオフィス、シェアサイクル、カーシェア、ライドシェア、シェアハピ…シェアという言葉を、ここ数十年の間によく耳にするようになった気がしています（私が中学生の頃にshareの英単語を習ったときは、日常で耳にするようなこととはなかったように思います）。このように、シェアを用いた造語がたくさん日常にあふれていますが、その使い方がどうもしくりこないことがあります。歳もあり、新しい言葉をすんなり受け入れられなくなっただけかもしれませんが…（笑）。特に最も新しく知ったライドシェアなんて、全然しっくりきません。私がライドシェアから想像するのは「相乗りタクシー」です。ところがどっこい、ライドシェアの意味はものすごく簡単にいうと「白タク」だそうです。なんだか、なにかしらを共有する新しいサービスには「シェア」という言葉をとりあえず用いておけばいい、そんな風潮があるように思います。

そういつた疑念から少し原点を調べてみました。shareの語源をたどると、古期英語 scearu やゲルマン祖語 skerana などに由来するそうで、「元の意味は、「ひとつのモノを切り分ける・分割する」です。それが時を経て「共有する」といった意味で用いられるようになったようです。つまり、モノを切り分けるシェアから、モノを切り分けないシェアへと変容してきたとのこと。現在、日常でよく耳にするシェア○○や○○シェアでは、モノのシェアの枠を超えて、コトのシェアとしても用いられることが多くなってきたように思います。時代の流れもあり、言葉の意味の拡大解釈から、言葉の使われ方や意味が変容していくことは、大変興味深いことではあります。素直に受け入れるには少ししんどくもありません。受け入れられるキャパシティと心構えを備えておく必要性を感じます。

さて、私も少しシェアという言葉の拡大解釈（想像）させていただきますと、「モノ」のシェア→「コト」のシェアとくれば、次は「トキ」のシェアかと思えます。言葉騙しではなく、本当の意味で時間を分けて共有できる、モモのようなSFファンタジーな世界が来るかもしれませんね。また、その頃には、言いやすさの観点から、シェアからシェアになっっているかも？

シェアと所有のバランス

芳田知紀：

都市再生・マネジメントグループ



生成AIが描くシェアサービスが充実した社会

私は、日常的にタイムズカーシェアやループを使っており、終電が無ければ、ループを使って自宅の近くまで移動することが可能ですし、シェアサービスを使うことで日々の生活を快適に過ごすことができます。

「シェア」という言葉は、現代社会において特別な重要性を持つようになりました。私たちは日常的に「カーシェア」や「シェアサイクル」といった用語を耳にし、様々なシェアサービスの仕組みに触れる機会が増えています。これらのサービスは、「何か」を所有することなく不特定多数の誰か「何か」をシェアすること、利便性とコスト効率を提供しています。また、シェアサービスによって、都市内における「何か」の数量は、最小公倍数的に収められているので、無駄なものをできるだけ排除するという点で、地球環境にも良いし、都市の持続可能性を高める役割を果たしていると考えています。

しかし、所有の喜びという基本的な人間の欲求に目を向けることも、同じくらい重要と考えられています。

例えば、車の所有は、これまでも多くの人にとって特別な意味を持っています。シェアサービスが今のように普及する以前、例えば私の父親の世代であれば、車を持っていることが1つの明確なステータスを表すものであったようです。対して私の世代は、車離れが社会で騒がれるように、車の所有に対する興味関心の程度が変化してきたように感じています。しかし、誰もが少年時代にスーパーカーに乗りたいと一度は、思ったはずで、道路を轟音とともに走り去るウラカンに憧れを持ったはずで、私の夢は、その頃から焦ることなくマクラーレンに乗ることです（笑）。この夢あふれる所有欲は、人間の基本的な欲求として捨ててはならないと考えています。車は単なる移動手段を超えて、個人の夢やステータスの象徴、憧れや人の喜びを表すものではないでしょうか。

このように、シェアと所有は、現代社会における私たちの行動に大きな影響を与えています。両者は相反するように捉えてしまうのではなく、自身のライフスタイルや価値観に基づき、これらの選択肢をバランス良く活用することが求められるのではないのでしょうか。

「間借り」 営業という文化

高瀬咲：
地域再生デザイングループ



“ARCHI coffee & wine”を
「間借り」する“名珈琲”

ここ1年京都の美味しいお店を開拓しようと勤しむ中で、同世代の飲食業の友人達ができ、「間借り」という文化を知りました。「間借り」とは飲食業のお店の定休日や営業時間外に、飲食に関わる職能を持つ個人がお店の設備や空間を借りて、イベント的に出店することです。月1回や週1回など様々な営業形態があり、コーヒーやお菓子などのお店が多いイメージです。

同じ空間をシェアして別の店が使用するという出店形態は、シェアキッチンやレンタルスペース等でも（広義ではそれも間借りといったりします）よく見るようになりましたが、「間借り」では「空間を貸し出す店主」という存在と「お店の空間自体の魅力」が付加されることで魅力的なポイントです。貸主の店主も「間借り」から始まってお店を出した人や飲食力チャーター自体の振興を志す人が多く、貸し出すお店の方も自分の発信媒体で「間借り」の宣伝を行うなど、縁がつながっている様子がみてとれます。

また、必ずしも将来出店するための「ステップ」という位置づけで行っているわけではなく、多くは、自分の志す「飲食という表現」や、「飲食を通じた集い」を実現する場として「間借り」を行っているようです。「間借り」を行うお店も、縁も含め、自分の思う心地よい空間や飲食の表現に合った場所を選んでいると感じます。同じ空間を使っている、立つ人や使う道具等によつて、お店の雰囲気が変わると変わって見えるのも、都市・まちを楽しむ視点からは面白いと感じるポイントです。

SNSでお店を探している、「間借り」のお店、イベント出店のみのお店や通販だけのお店など、地図上にあるお店、ないお店が混在して出てきます。ハードの店舗に紐づかないお店をのぞき見るのは、少し年上の皆様にとつては新しい感覚なのではないでしょうか。

まだまだ開拓途中ですが、声かけていただければおすすめて「シェア」させていただきます。

シェアハウスの暮らし

太田雅己：
生活デザイングループ

大阪市大正区にあるシェアハウス（名称：ワンラボ）に暮らししています。住まいをシェアする暮らしを紹介します。

ワンラボは2階のリビングや作業スペース、それから屋上が共用部で、3階に鍵がかかる個人の部屋が5室ある、5人のシェアハウスです。住民の年代は、同年代（20代後半から30代前半）です。

ワンラボで暮らしている中で、3つのシェアがあります。まず1つ目は「場所」。大きなリビングや作業部屋、屋上など、とても一人暮らしでは得られない部屋を維持できています。2つ目は「もの」。リビングに置いてあるものは共用にしておいて、例えば本棚の本は自由に読んでいいようにしています。他人の本棚は新鮮で、自分じゃ買わないような本から刺激を受けます。3つ目は「人」。定期的に集まったり、友達を呼んできたりして、新しいつながりが生まれます。また、仕事から家に帰って誰かいるというのは安心感があります。



リビングの様子：床のクッションフロアや壁の塗装、本棚などはDIYでみんなで作成

一方、やはり難しいところもありません。深夜までうるさい、掃除が甘いなどの基本的なマナーの問題や、人の相性によるものも。その都度、意見交換してルールを考えながら対応しています。縛りすぎると生活しづらくなるので、あくまでも緩いルールの中で、みんなが感じに許容しながら楽しく暮らせるようにしています。

みんながそれぞれの価値観を持ち、その擦り合わせをしながら、快適な環境を維持・向上させていくというのは、「まちづくり」や「コミュニティづくり」そのものだと思います。実際のまちづくりでの関係性はもっと難しくて泥臭いところもありますが、仕事でも、シェアハウスでの暮らしを通して感覚を持ちながら、みんなでシェアする居心地がいい場所をどんどん増やしていけたらと思います。

なおワンラボでは現在1部屋空いており、募集していますので、興味のある方は検索するか、お声がけください。

困難女性支援法に基づく基本計画づくりが進んでいます

依藤光代：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

2022年5月に「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」が成立し、都道府県では今年度、基本計画を定めることになっていきます。

当グループでは、愛知県ならびに静岡県による、基本計画の検討のための調査業務を受託しています。

愛知県では9月25日に、女性の支援を行う民間等活動団体の参加を得て、ワークショップ形式の会議を開催し、我々はそのファシリテーションを行いました。

まずは、当事者である「困難を抱える女性」を主語として、支援メニューを認知する、選択する、相談する、支援を受け始める・・・という、支援のステップの全体像を共有しました。その後、各団体の活動がステップのどこをカバーしているのかを整理し、地域内の支援活動を「見える化」しました。さらに女性支援の課題はどこにあるのか、どう乗り越えられるのか、意見を出し合いました。

現場の声の一部をご紹介します。女性の困難は複合的で、最初は生活困窮としての相談があっても、DVを受けているのではないかという現状がだんだん明らかになってくる。じっくり話を聞きながら多様な困難を紐解き、すでに受けている支援、まだ支援を受けていない問題を

整理して、今後の支援の優先順位を一緒に考えていくことが、場当たりにならないために重要。どの支援制度につながるかを考える際に、公的制度も民間による支援も関係なくあらゆる可能性を視野に入れるのは、民間団体だからこそやれることなので、これからも民間団体がアセスメントをやっていくために、行政からのサポートが欲しいという声もありました。

また、例えばDV被害者だと、加害者から「逃げる」というのは、親類や友人関係などこれまでに築いてきた一切の環境を離れるということを伴う、とても勇気の必要なこと。決断までは時間がかかるのは当たり前で、本人が決めるまで、相談支援を通して粘り強く寄り添い続けることが重要だ、という言葉が印象的でした。尊厳を大きく傷つけられてしまったからこそ、支援や安心できる人間関係のなかで時間をかけて回復していくことが大切です。

活発に意見が出て、時間が足りないほどでした。地域の支援団体の情報交換のためのネットワークが求められていることが分かりました。
※2023年4月に、育休から復帰しました。今後ともよろしくお願ひします。

地域で取り組む空き家対策ガイドブックを作成しました！

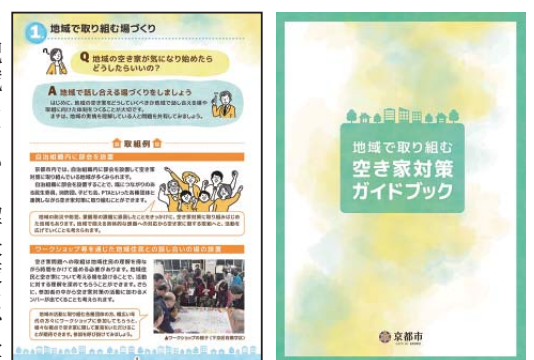
内野絢香

生活デザイングループ

京都市では、平成22年度から「地域連携型空き家対策促進事業」を実施しています。

この事業では、空き家の発生予防・活用及び適正な管理により、地域が活性化することを目指しながらも、空き家の所有者や入居希望者が安心して空き家を活用できる環境を整備するため、取組に係る経費の助成や専門家の紹介、活動団体相互の情報交換等の支援を行ってきました。これまで事業に取り組んできたのは63地域・43団体にものぼり、この事業への取組がきっかけとなり、地域の空き家問題に向き合うことになった地域も多くあります。

昨年度、作成をお手伝いしたガイドブックは、地域の空き家対策において、取組過程で生じる課題や悩みとその解決策を、実際に活動に取り組んでおられる地域や市の制度を交えて紹介する冊子です。地域で取り組む空き家対策には、人手や活動資金の確保、さらには空き家という個人の資産にアプローチをするという難しさがあります。そもそも、「何をしたらいいんだろう?」と思う地域だけでなく、「これくらい簡単に続ける方法もあるのか!」等の、既に取組を行ってきた地域にとっても有益な情報をまとめています。



記載している解決策は、実際に活動に取り組んでおられる地域にヒアリングを行い、まとめていきます。ヒアリングの中では、地域で試行錯誤しながら活動を続けておられる様子や、負担を減らすために、驚くような工夫をされていることもお伺いできました。中には、事業終了後に活動資金の獲得の難しさ等から活動が終了している地域もあり、「どのようにに続けていけばいいのか分からない」という声も聞かれました。地域での活動は、一度途絶えると再開しづらく現状もあるため、今回の冊子をきっかけにして、できることから続けていける道しるべを見つけてもらえると嬉しいです。

公共公益施設が閉鎖された後の利活用のあり方に関する検討を進めています

山崎将也

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

文部科学省の調べによると平成14年度から令和2年度の10年間に廃校となった小中学校は8千5百を超えるようですが、学校以外にも人口減少や市町村合併による施設の余剰や老朽化などから、公共公益施設が閉鎖されるケースは多く見られます。

今年度、このような閉鎖施設の利活用に関する検討業務を2つ実施しています。

一つは埼玉県坂戸市にある廃校した小学校、もう一つは東京都府中市が山梨県に保有する山荘の利活用に關する検討です。いずれも市民や地域の思いが強いほか、周辺との関係の中で利活用のあり方を定める必要のある施設となります。

■旧城山小学校

坂戸市西坂戸地区は市中心部から車で20分ほど離れた郊外部に位置しており、昭和40年代に整備された住宅団地を中心とする地区となっています。少子高齢化や地区内商店街の衰退などオールドニュータウン化が進んでいる中で、平成27年に地区内の城山小学校が廃校となり、以降利用されないままの状態が続いています。

旧城山小学校は、校舎とグラウンドの間が大きな斜面地となっており一体的な活用には課題があるとともに、校舎の老朽化など、施設の利活用に向けた課題がある中で、今



地区内のシャッター通りとなった商店街

後の地区のまちづくりに寄与する利活用のあり方を模索しています。高齢化が進む現在の地区の課題を中心に対応するのか、将来を見据えた利活用を図るのか、あるいは地区の活性化に向けた新たな展開を目指すのか、今後、地域の人の意見も伺いながら方向性を詰めていく予定です。

■八ヶ岳府中山荘

避暑地として人気の清里にほど近い山梨県北杜市の県有林の中に八ヶ岳府中山荘があります。周辺は学校寮地区と呼ばれる都内の自治体が保有するセカンドスクールなどが集積したエリアとなっています。

府中山荘は昭和40年代から50年代にかけて建設され、市内の小中学校が夏季のセカンドスクールとして利用してきた施設です。しかし築40年



中庭を囲む「口の字」型の校舎

程度が経過する中で施設の老朽化・不具合が生じるようになり現在は臨時休館しています。セカンドスクール自体は他の施設を利用する方針となり、今後の山荘のあり方について検討を行っています。

基本的には民間事業者に施設を譲渡して活用してもらおう方向ですが、地権者である山梨県の意向や周辺環境との調和など、利活用に向けた要件を満たす必要があります。

今年度は民間事業者に対するサウンディング調査を実施し、利活用に向けた意向や課題などを聞き取り、今後の施設のあり方に関する方向性について検討しました。

業務対象の2つの施設は立地環境は大きく異なるものの、市民や地域の思いの強い施設であることが共通しており、今後の利活用についても、



施設内には展示ホールもある



レンガ貼りによる落ち着いたたたずまいの正面玄関

いかにその思いを汲んで理解してもらえ方向性を打ち出せるかが大切となりますが、今時点では直接声を聴く機会がなく、手探りで検討となっているのを心苦しく感じながら進めているところです。

「脱炭素」につながる買い物「かながわCO₂CO₂ポイント+」始まっています

植松陽子：

サスティナビリティマネジメントグループ

脱炭素が重要かつ必要だということ、そのために国でも産業界でも様々な動きが加速していることは周知されつつありますが、私たち一人ひとりの具体的な行動がどうか？というところ、「うーん、なかなかね…」と口数が減る方も多いのでは？

「何をしたらいいかわからない」「お金や手間がかかるからできないよ」という方もいますよね。

神奈川県では、11月1日から来年1月31日まで、脱炭素に貢献する買い物や消費行動に、店舗が発行する従来のポイントに加えて、さらにポイントを上乗せするキャンペーン「かながわCO₂（コツコツ）ポイント+」事業を実施しています。

この事業には、6つの小売事業者（京急ストア、PIAZAを展開するスタイリングライフ・ホールディングス、生協パルシステム神奈川、生活クラブ生協・神奈川、そごう・西武）が参加し、県内各地で、県産農産物や化粧品等の詰め替え商品、使用済み容器の持参等へのポイント上乗せを行っています。

どんな商品やサービスでもエネルギーや資源を使う中でCO₂を出しますが、使う材料や作り方、運び方、商品の性能等によって、その量は変わります。例えば、地元農産物は輸送距離が短い

で、燃料消費によるCO₂を削減できますし、詰め替え商品の購入や持参容器への量り売りは使用容器を減らせるので、容器製造時のCO₂を削減できます。使用済み容器を回収できれば、ごみ焼却によるCO₂削減につながります。脱炭素化に向けては、もちろん省エネ・再エネの大胆な投資も必要ですが、私たちが日々買い物をする中で、商品やサービスの選択を一つずつ変えることで貢献できることも多いのです。

アルパックは、(株)日本旅行社との共同企業体で、事業の運営事務局を担っており、今後対象商品等の脱炭素効果の可視化やポイント付与による消費行動の変化等、事業の効果検証を行う予定です。ポイント付与というきっかけが、消費者の理解や行動変容につながることに期待し、事業者のみならずと事業展開していきたいと思っています。



「かながわCO₂CO₂（コツコツ）ポイント+（プラス）」サイト

イノベーションを促進する拠点の機能を探る

貴船律子：

地域産業イノベーショングループ

1990年代初頭の長期経済低迷を脱却すべく、新たな産業の基軸の形成や生産性の向上につながるイノベーションの創出に向けて、官民ともに様々な取り組みが行われています。

また、気候変動、少子高齢化、ICTの顕著な発展と急速に変化する社会環境のもと、変化に対応したイノベーションの創出機会も増えています。

そのようなイノベーションの創出を地域で促進するイノベーション拠点に関する調査の一環として、国内外のイノベーション拠点の機能を調べています。

経済成長の最も根源的な要素となるイノベーション創出に向けた展開は世界的な動向



来街者で賑わうSTATION F（出典：STATION F提供）

であり、海外における先進事例からも多くのことが学べます。そのような海外の先進事例の一つに、世界から注目を集めているSTATION Fがあります。STATION Fはフランスの実業家が、パリ市南部の13区にある旧国鉄の貨物列車駅舎をリノベーションして、2017年に開設しました。

敷地面積約3.4ヘクタール、長さ約300メートルの建物内に、国内外の約1000のスタートアップ企業が入居し、30以上のプログラムが実施されています。また、マーケット、カフェ、バーも充実しており、一般市民を含め年間10万人が訪れ、常に賑わいを見せています。都市部に整備された巨大なイノベーション施設も関心が高いのですが、利用者からは多数のスタートアップ企業がいる環境や様々なプログラムが評価されています。特に厳しい選考に残らなければ利用できないプログラムもあり、独自のイノベーション支援の仕組みが構築されています。

STATION Fから提供された資料によると、運営や事業についてスクラップ&ビルドを繰り返していることが伺えます。定まることがなく、変化し続けることが、イノベーション拠点にも重要な要素ではないでしょうか。

神戸で森とまちをつなぐプラットフォームがスタートしています

中川貴美子：

サステナビリティマネジメントグループ

地域の財産である森林を育み、活用し、次世代へ繋いでいく。公民共創の場として、「こうべ森と木のプラットフォーム」が設立されました。

温室効果ガス排出削減や災害防止のための安定的な森林整備等を進められるよう、2019年3月に「森林環境税」と「森林環境譲与税」が創設され、各都道府県、市町村に配分されます。神戸市は大都市である一方、市域の40パーセントが森林となっています。そこで、森林環境譲与税を、「森林整備」「木材活用」「普及啓発」「人材育成」の4つの視点から、森林循環を促進する動きを進めています。

同プラットフォームでは、山主を支援するワンストップ窓口や、木材活用に関するリスクを



設立総会の様子



ストックヤード欄卸し市の様子

ステークホルダーで分散するため、「ストックヤード」の運営もスタートしています。森林整備で搬出可能な木材を搬出し、公共建築や民間事業者へ活用する道筋をつくる、また、ただ活用するのではなく、「適切な価値」で循環させ、また「人材や産業を育む」取り組みにつなげる。そのため、試行と仕組み化を行っています。

取り組みの詳細は、HP (<http://www.hyogoforest.or.jp/platform/index.html>) や note (<https://note.com/vast-beetle338/>) で配信していきます。本業務は、ひょうご森林林業協同組合連合会（公財）ひょうご環境創造協会と協同運営しています。



新人紹介

仕事も趣味も幅広く



奥田真以
総務部

10 月から総務部に配属になりました。た奥田真以と申します。生まれも育ちも大阪です。大学時代は健康教育学を学びました。学生の頃はゼミ・バイト・カラオケを繰り返す日々でした。新卒で入社した会社では一年目で情報システム部に、二年目からは経理部に異動となり、どちらも全く経験のない分野でゼロから学ぶ日々を過ごしました。

経理の仕事に従事して早数年、私は経理だけではなく、もっと様々な間接部門で経験を積みたいと考えるようになりました。そして、アルパックとご縁があり、お世話になることにしました。これからは総務部として広く学びを深めつつ、職場の皆様にとって働きやすい環境づくりを目標として取り組んでまいります。

指し、精進してまいります。

近況についてお話しさせていただきます。人生色々ありまして、中学、高校、大学と年を重ねるにつれて内向的になってしまった反動か、社会人になってからは多趣味になりました。手芸をしたり、音楽を奏でたり、写真を撮りに出かけたり、観劇したり、テーマパークに行ったり…。最近の休日は主に手芸とテーマパークで充実しています。大阪の某テーマパークには月に一度か二度ほど通っており、一人で訪れることもしばしば。パークを一周するだけでも運動になり、気持ちもうきうきします。私は都市計画やまちづくりは全く未知の領域ですが、パークを歩いているだけで高揚する気持ちは、パークを彩る建築や人々の動線など、もしかするとテーマパークという小さなまちづくりの結果かも、と素人目を感じる今日この頃です。

写真は「赤と青」をテーマにして撮影した一枚です。気ままにカメラを持って街に出かけることは好きなのですが、自分が写っている写真がほとんどないことに気が付きました。今後は自分を被写体にした写真も撮ってみようと思います。

まだまだ間接部門の業務、まちづくりの分野ともに未熟な私ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

「京都・建築家の仕事展その手法と哲学」に出展しました

原田 稔：
建築プランニング・デザイングループ



「京都・建築家の仕事展 その手法と哲学」と銘打った JIA 京都地域会建築家展が 9 月 7～10 日に京都で開催され、建築プランニング・デザイングループも出展しました。この展覧会は JIA 京都地域会に所属する建築家の作品や活動を紹介するもので、作品写真の他にも手書きのスケッチや図面、模型や映像など様々な方法で建築を設計する過程や手法が展示されていました。私たちの展示は「まちに新しい姿を創出する」というテーマで新築やリニューアルによりまちに新しい建築を挿入することにより生まれる新しい人々の営み

や活動を新しいまちの姿と捉えて、その様な人々の行為を産み出すきっかけとなるいくつかの作品を紹介しました。

三条通にある京都文化博物館（旧日本銀行京都支店：重要文化財）を会場として開催されたこともあり、一般の方や外国人観光客も多数来場され、4 日間で 2000 人を超える来場がありました。私も最終日の日曜日に会場に詰めて来場された方や他の建築家の方と話したなかで、「建築家はまちづくりや人々の活動にもっと関与していくべき」と言うことが社会にも浸透してきたことを実感することが出来ました。



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

58 回

2023 年
10 月 6 日

「街場の建築を開く」

講師 SPACSPACE 一級建築士事務所
香川 貴範氏、岸上 純子氏

第 58 回の適塾路地奥サロンでは、SPACSPACE 一級建築士事務所の香川貴範氏と岸上純子氏をお招きし、「街場の建築を開く」というテーマでご講演いただきました。

講演では、『キノコハウス』や『庭の形』、『SPACSPACE HOUSE』などのこれまでお二人が手掛けた作品を例に挙げながら、どういった視点で建築を設計しているのかを教えてくださいました。中でも、興味深かったのは、「行動を規制するものが、ある制限を外れると、新たな行動を誘導する」という視点でした。建物を設計する際の条件を様々な視点で見ると、一見マイナスに見えるようなことも違う側面ではプラスの面で見ることができるなど、しっかりと周辺環境や街を読み解くことがカギであることを教わりました。また、お二人は建物が「どのような都市のシーンを生み出し

てくれるのか」という視点も大事にして、設計しているとおっしゃっていました。その中で、「街場の建築を開く」効果的な仕掛けは、ファサードを街に開放するような大胆なものばかりではなく、人々の行動を誘発させるようなヒューマンスケールの細かな仕掛けも重要であるとおっしゃっていたのが印象に残りました。

そして、最後におっしゃっていた「お金を使わないと楽しめないのはつまらない都市空間」というお話には私自身もとても共感し、まちづくりに深くかかわる立場にいる者として、人々にとって良い都市空間とはどのようなものか改めて考える良い機会になりました。（石橋昂大）



近況 & イベントのお知らせ

事務所だより

京都

「京都事務所が移転しました」

京都事務所長 三木健治

10月10日に、京都事務所が半世紀近くあった四条高倉のビルから移転しました。四条通りを東に50m、高倉通りから柳馬場通りへの移転です。

長年借りていた地下倉庫を整理すると、関西文化学術研究都市の構想資料や、京都市をはじめとする各地の総合計画等の資料など、数十年前の貴重な資料が数多く出てきました。膨大な手書きの資料やスケッチ、何十枚ものパースなどをみると、これまでの諸先輩方の仕事に対する思いがひしひしと伝わってきて、これから自分自身がどのように仕事に向き合うべきかを改めて考え直す機会となりました。

1年以上前から、所員全員で移転先を検討してきましたが、長年いた四条通りに対して愛着のある所員が

多く、また、これからも京都にこだわるなら京都の中心で仕事を続けようという思いから、四条通りに面したビルへの移転を決めました。

新たな事務所の在り方を考える中で、さらに社外の方々と広く交流していくことが重要ではないか、また、所員同士のコミュニケーションをもっと深めるべきではないかといった議論から、四条通りを面した場所に広い交流スペースを設けることとしました。今後、この交流スペースを活用した勉強会等の取り組みについても考えていきたいと思えます。

これからも京都にこだわりつつ、全国各地のまちづくりにかかわっていきたくと考えております。お近くにお越しの際には、ぜひお立ち寄りください。



四条通りに面した交流スペース



執務スペース



新住所：京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町 99
四条SETビル 2F



エントランス



絹原一寛

都市再生・マネジメントグループ



メルボルン・シドニー海外 視察レポート

8月末から9月頭にかけて、オーストラリアのメルボルン・シドニーを視察する機会に恵まれました。

大阪市の御堂筋関係のメルボルン市公式訪問に、エリアマネジメント団体として、自費負担の上で同行させて頂きました。シドニーはメルボルンから飛行機で1時間なのでセツトで見学に行きました。

メルボルン市は大阪市と姉妹都市の関係であり、この10月にはスワンストン・ストリートと御堂筋の姉妹ストリート協定の調印(更新)をされました。世界で最も住みたい都市で名が挙がりますし、歩行者中心の



シドニー・ロックスマーケット

都市づくりで大変有名です。

中心地区(CBD)はトラム(CBD内は無料!)が縦横無尽に走っており、自動車よりも優先されています。自転車レーンも整備され、サイクリストにとっても安全。日本のようなスピード出し過ぎ/ノーヘルは見られず、真にウォーカーフレンドな街路空間はこういうことか、と実感できました。路地はレーンウェイと呼ばれ、ペイントアートの彩られたレーンウェイは観光名所になっています。路上でのテラス席が夜の賑わいを演出。歴史的な建築物も多く、治安も良く夜をそぞろ歩きも楽しめる、本当に過ごしやすい街でした。

今回、大阪市によるヒアリングにも同席させていただき、メルボルン市のシンボルプロジェクトであるグリーンラインの他、コロナ禍からの復興策、脱炭素・気候変動、データ活用やコミュニティ振興など、多岐にわたる市の担当部署の方や、不動産コンサルタントやメインストリート協会の代表とも意見交換ができて、大変有益な訪問でした。

シドニー市はオーストラリアの中心都市。世界遺産にもなったオペラハウスに代表される観光都市で、アフターコロナもあって世界中からの

観光客でごった返していました。オペラハウスは流石の建築美、まさに都市のアイコン、シドニーに行けば誰もが訪れたい建築です。完成まで非常に難航したプロジェクトでしたが、こうして時代を超えて存在するアイコンがシドニーにあつて良かったと感じました。

ここでも街の中心部を南北に貫くジョージ・ストリートにはトラムが走り、自動車の乗り入れはできません。シドニーは湾が特徴で、気持ちよく歩ける海沿いの遊歩道にビル側からテラス席が配置され、賑わいを感じながら歩ける仕掛けが上手くデザインされていました。日本のウォーターフロントはどうしても殺風景なイメージがあり、この辺りは日本も大いに学ぶべきだと思います。加えて、都会でありながら喧騒を離れて過ごせる公園も充実し、ここで住むと楽しいだろうなと想像します。

シドニー最後の夜はオペラハウスを望めるテラス席でシーフードを堪能しましたが、オーストラリアはほぼキャッシュレスで、現金が使えない店の方が多く、さらに円安もあってか物価はほぼ倍……！ディナーも1人1万5千円くらい。日本も質の良い体験を提供し、観光客の単価を上げることが真剣に考えないと……と痛切に感じました。

早速、いろんな場面でこの体験談を活用しています。海外に学ぶ機会は貴重だと感じました。

表紙写真：メルボルン・パークストリート (撮影 絹原一寛)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン(ベトナム)	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam		



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。